

# 日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第128号 令和8年(2026)6月1日

資料見聞

伝細川半蔵作 茶運び人形 (当館蔵)



伝 細川半蔵作 茶運び人形



半屋弘蔵作 復元 茶運び人形 (当館蔵)

通称「からくり半蔵」として親しまれる江戸時代の郷土・細川半蔵(諱は頼直)は、寛延元年(1748)に長岡郡西野地村、現在の南国市に生まれました。時計やからくり作りに熱中した半蔵は江戸で天文算術を学ぼうと志して息子に郷土職を譲り、浪人となって土佐を旅立ちます。江戸での学問が認められた半蔵は、寛政5年(1793)に幕府から寛政改暦の事業を担う5人に選ばれ、藩からも三人扶持と禄五石、改めて白札の身分を与えられました。ところが、半蔵はこの改暦の成果を見ることなく、寛政8年(1796)、江戸にて49歳で没します。死因や墓所など不明で、毒殺されたという説まであります。

当館が蔵する茶運び人形(右写真・上)は、この半蔵の作品といわれるものです。玩具のコレクターであった故・城田政治氏が昭和45年に高知県立郷土文化会館(当時)に寄贈したうちの一点で、平成3年、開館を間近に控えた当館へ移管されました。もとは日本郷土玩具協会会長の有坂与太郎氏の所有でしたが、有坂氏が「土佐の先人が作ったものだから土佐に返すべき」として城田氏に譲られたと、同氏は回顧しています(『収蔵資料目録 郷土玩具・城田政治氏寄贈コレクション』当館、平成7年)。半蔵の著作であるからくりの解説書『機巧図彙』(寛政8年(1796)出版)にも、同じ茶運び人形の図がありますが、本当にこの

人形が半蔵の作品か、判断すべき材料はありません。

当館の茶運び人形は動かすことができますませんが、復元された茶運び人形(右写真・下)は動かすことができます。服を着ていないため、ゼンマイを巻くなどの部品がどのように動き、人形が作動するかを見て理解することができます。

当館の目玉資料ともいえるべき茶運び人形ですが、昨年4月26日の高知新聞「わが館のイッピン」でも紹介されました。開館以来数度にわたり、からくり人形の展示をおこなっています。今夏もこのからくり人形をテーマにした企画展を開催します。(亀尾)

# 企画展 からくり人形のヒミツ

## — 細川半蔵と『機巧図彙』の世界 —

会期：令和8年7月3日(金)～9月27日(日) 亀尾 美香



細川半蔵著『機巧図彙』寛政8年(1796)刊(当館蔵)

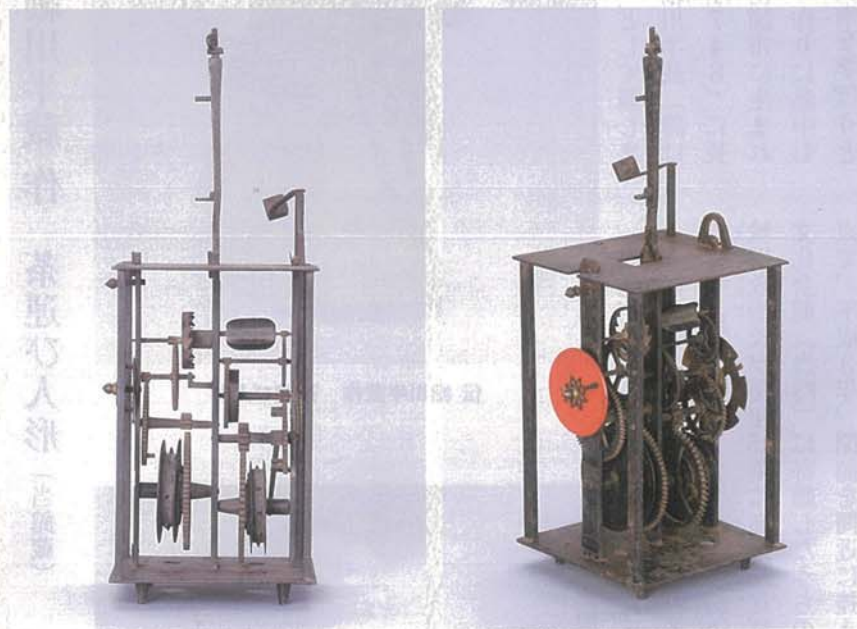
当館所蔵のうちでも目玉資料である、伝細川半蔵作の茶運び人形。これと併せて、当館では半蔵によるからくりの解説書『機巧図彙』(3冊)と、同様に半蔵作と伝わる「一丁天符櫓時計」を所蔵しています。『機巧図彙』は昭和60年(1985)に県が古書店から購入して郷土文化会館(当時)に納められ、当館へ移管された資料、櫓時計は高知城の懷徳館にかつてあり、同様に当館へ移管された資料です。表紙で紹介した茶運び人形、『機巧図彙』、櫓時計、細川半蔵ゆかりの資料が、それ

ぞれの別の道を経て当館に入ってきているのは面白いですが、終着点が同じなのは、当館が「高知ゆかりの」資料を収集しているからこそその現象ともいえます。

『機巧図彙』は、「からくりずい」とも読みます。便宜上、音読みで「きこうずい」と読んでいますが、むしろ「からくりずい」の方が適切かもしれません。当館にあるのは寛政8年(1796)刊行の3冊本ですが、奥付がなく、序文は「寛政丁巳春」、すなわち寛政9年(1797)となっています。半蔵の死と前後して出版された事情が関係する可能性があります。序文を書いたのは「萬象主人」とこと森島中良、蘭学者であり、かの平賀源内に

戯作(滑稽本や黄表紙などの通俗小説)を習ったという文筆家でもありました。半蔵の『機巧図彙』はベストセラーになったといわれ、文化5年(1808)には再版されています。

当館が蔵する『機巧図彙』には、序文のある上巻に茶運人形、五段返、連理返、首巻に柱時計(掛時計)、櫓時計、尺時計、下巻に龍門漣、鼓笛児童、揺盃、鬪鶏、魚鉤人形、品玉人形の12種類のからくりが、内部の部品やしく

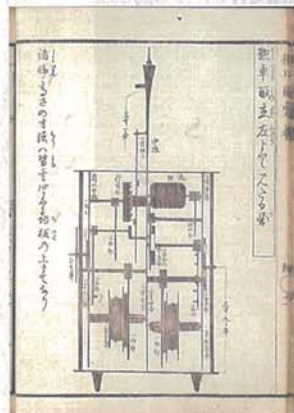


伝 細川半蔵作 一丁天符櫓時計(当館蔵)

みとともに紹介されています(首巻の目次には「枕時計」もあります。本文がありません)。たとえば、当館蔵の櫓時計を横から写した写真と、『機巧図彙』の櫓時計の側面図(写真)を見比べると、非常によく似ていることが分かります。櫓時計が半蔵作と伝わっていることから、『機巧図彙』との関連性がうかがえます。

茶運び人形についても同様のことが言えますが、古い資料台帳には「調速部の位置や前輪の仕組みが『機巧図彙』と異なる」とあります。どのような調査を経ての見解かは不明ですが、傍証がない以上、作者を半蔵と断定するに至らないことは確かです。

『機巧図彙』では六丁半、ページにして12ページにわたり、茶運び人形を図解しています。現代に復元された茶運び人形も、この『機巧図彙』にならって作られており、構造や部品はほぼ同じです。半蔵が江戸時代に描いた設計図が、そのまま動く人形として現代によみがえるということは、驚きに値し

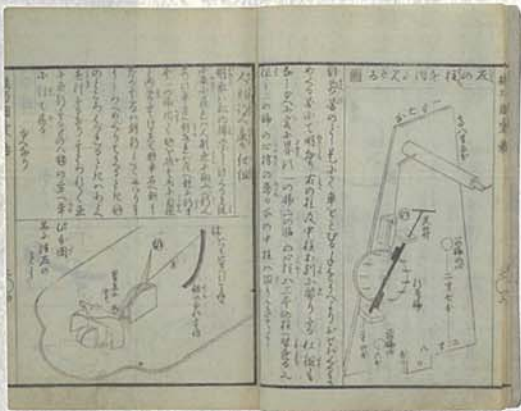
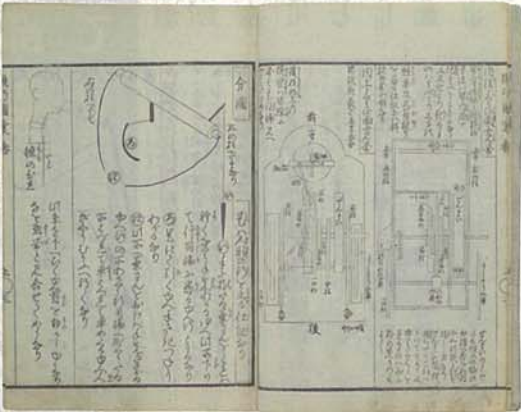


『機巧図彙』より  
櫓時計を横から見た図

ます。

今回の展示では、半蔵のふるさとである南国市を拠点に長年活動が続ける「からくり半蔵研究会」の協力を得て、茶運び人形以外の復元からくり人形3体も展示します。ぜんまいや歯車といった昔からあるありふれた部品を元に、いったいどんな仕組みで人形が動いているのか？ お子さんだけでなく大人の方にも、すこし頭をひねっていただけ展示にしたいと考えています。

(亀尾)



「機巧図彙」より 茶運び人形の図



半屋春光作 復元 段返り人形 (からくり半蔵研究会蔵)  
水銀を利用したからくり。水銀が移動する重みで、人形がゆっくりとんぼ返りをしながら段を下ります。



半屋春光作 復元 品玉人形

(からくり半蔵研究会蔵)

「品玉」は今でいう手品。童子が箱を開けるたびに、中の品物が次々と変わります。



半屋春光作 復元 鼓笛児童人形

(からくり半蔵研究会蔵)

ぜんまい仕掛けで人形が笛を吹き、鼓を打ちます。

# 虎丸城跡と長宗我部家臣団が改修した 上佐山城跡を巡って

企画展準備中

松田 直則

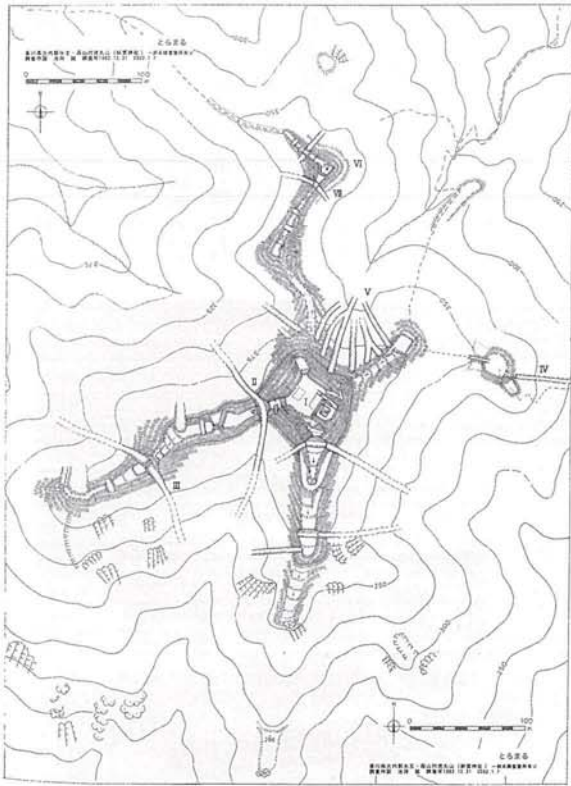
令和8年4月11日に、香川県東かがわ市に所在する虎丸城跡と高松市の上佐山城跡の調査に、歴史担当の青井学芸員と行ってきました。何故、香川県でこの二つの城の調査を行ったかという、長宗我部元親が四国制覇をしていく中で、この二つの城が重要な意味を持っているからです。東かがわ市水主に所在する虎丸城跡は、地元の土豪である寒川氏の持城でその後安富氏、十河氏が城主となっています。長宗我部軍が虎丸城を攻めたのは天正11年（1583）頃と考えられています。

長宗我部軍が攻めた事実は、軍記物や一次史料の香宗我部家伝証文にも記載されています。しかし、長宗我部軍が侵攻しても虎丸城は落ちていないと考えている研究者もいて、当館の長宗我部展示室では讃岐の虎丸地域は支配でしなかつたとパネル表示をしています。そこで、注目されるのが虎丸城に構築されている畝状堅堀群です。畝状堅堀群は、緩傾斜地に連続した堅堀を築き、横方向の移動を遮断する遺構のことを言います。戦国時代の後半に九州北部の秋月氏や大友氏、中国地方の毛利氏、長宗我部氏などが畝状堅堀群を構築しています。四国地方では、長宗我部氏が土佐国内や四国侵攻した時に拠点となる城を改修した時に構築した防御施設の一つです。特に長宗我部軍は、秀吉・秀長軍（羽柴軍）が攻めてくる時に、阿波や讃岐に構築したと私は考えています。

虎丸城跡は、香川県の中世城館詳細調査で城郭研究者が縄張り図を作成しており、畝状堅堀群が存在している図面が掲載されています。この時期に、この畝状堅堀群を構築できるのは、四国を制覇しようとして侵攻してきた長宗我部軍しか考えられません。縄張り図に描かれている畝状堅堀群が、長宗我部軍が構築した間違いのない防御施設であれば、虎丸城跡は陥落したことになり、この地域は長宗我部氏の支配に入っていたことが考えられます。

そこで、虎丸城跡の畝状堅堀群が気になっていて、今回企画展の調査に合わせて念願の畝状堅堀群をみる事ができました。まず、主郭の北斜面で谷状地形の急斜面にみられました。横移動で確認したのですが、滑り落ちる程急傾斜で、こんな地形の場所に築くだろうかとの疑問が湧きました。また、堀幅も広く上端部を見ると崩落しているような現状もみられました。当時の軍兵が構築したとすれば、滑り落ちな

がらかなり難儀な重労働だったと想像できます。またYの字状の堅堀にもなっているとありますが、自然地形か人工の構築物か意見の分かれるところだと思いました。これまでの城郭研究者の研究史もあり、私の意見だけで判断できるものではないですが、多くの城郭研究者にみて頂き議論をしてもらえればと思います。主郭部分に上がると、矩形状の曲輪で南西部端には土塁状の高まりを確認できます。南東部には一段高い檜台と考えられる曲輪があり、その両端部から下の曲輪の土塁につながる堅土塁が認められます。檜台の下の曲輪は、北西側と北東側の端には土塁状の高まりが認められず、登山客への建物なども存在していること



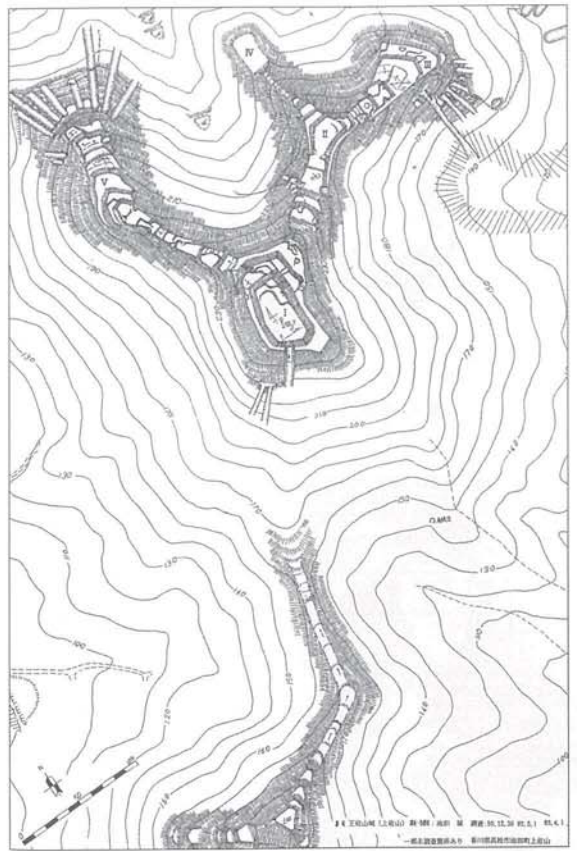
虎丸城跡縄張り図(1/3,000、図：池田誠)

虎丸城跡縄張り図 池田誠氏作図

がらかなり難儀な重労働だったと想像できます。またYの字状の堅堀にもなっているとありますが、自然地形か人工の構築物か意見の分かれるところだと思いました。これまでの城郭研究者の研究史もあり、私の意見だけで判断できるものではないですが、多くの城郭研究者にみて頂き議論をしてもらえればと思います。主郭部分に上がると、矩形状の曲輪で南西部端には土塁状の高まりを確認できます。南東部には一段高い檜台と考えられる曲輪があり、その両端部から下の曲輪の土塁につながる堅土塁が認められます。檜台の下の曲輪は、北西側と北東側の端には土塁状の高まりが認められず、登山客への建物なども存在していること



虎丸城跡から引田城下集落を望む



上佐山城跡縄張り図(1/2,500、図：池田誠)

上佐山城跡縄張り図 池田誠氏作図

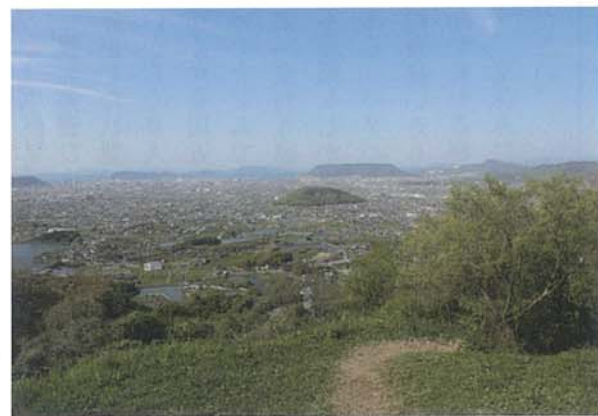
から、改変されている可能性もあると思います。主郭から尾根が四方に延びており、3箇所は堀切や堅堀で遮断されているが、その先の尾根上は自然地形の狭い曲輪群で構成されており、水の補給場所も麓まで行くしかなく、大軍が長期間駐屯できるような城ではないと感じました。しかし、主郭の北側から淡路島や引田城下集落が一望でき、南側には長宗我部軍の拠点となつた上佐山城とか西長尾城が見渡せ、敵の往来を監視するにはとても重要な城でもあると思いました。櫓台を持つ城は、讃岐では少ないと聞いていますが、櫓台を持つ構築技術が讃岐の在地国衆や十河勢力が持ち合わせているのか興味が湧きました。虎丸城の評価につい

ては、今後文献や縄張研究でも検討していく必要性を感じたところです。

上佐山城跡は、高松市植田町に所在する城跡です。上佐山とか王佐山とか呼ばれており、軍記物では「植田の城」とできていますが、所在する現町名も同じであることから同じ城と考えられます。城の規模は、南北約600m、東西約400mの範囲で香川県では大規模な城郭とみられています。在地の土豪である三谷氏の持城で、天正年間に長宗我部氏が改修したと考えられる城です。「南海治乱記」などの軍記物では、秀吉・秀長軍を迎え撃つために「植田の城」を拠点としたと記されています。また、貝原益軒の「黒田家譜」には、天正13年(1585)の羽



上佐山城跡遠景



上佐山城跡の主郭から屋島を望む

柴軍が讃岐にはいり屋島に上陸し、春日川を遡り植田の城にいる長宗我部勢を攻めたと出てきます。その植田の城には、長宗我部右兵衛尉を名代として2500余人が籠っていたとされています。そして、羽柴軍の大軍に降参する形で土佐に逃げ帰ったと記載されています。

この「植田の城」は現在上佐山城と呼ばれていますが、長宗我部軍が改修した遺構が残存しています。標高190mに主郭が構築されており、北東部と北西部、西部の3方向に派生する尾根上に各曲輪群が構築されています。北西部と北東部曲輪群の尾根先端部に、畝状堅堀群が確認できます。虎丸城跡の遺構と比べて、はつきりと畝状堅堀群と判別できるもので、長宗我部軍が改

修したものと考えられます。この城を改修した時期としては、羽柴軍の四国攻めに対応した頃と考えられます。

現在当館では、秋の企画展として「長宗我部元親の城づくり」の準備に取り掛かっています。改修された痕跡が残る讃岐の城跡を調査することによって、元親軍による四国制覇に向けた道筋が一つ一つ明らかになってきています。今まで軍記物でしか語られなかった元親の四国制覇の痕跡が、このように城跡に残っています。阿波や伊予の山城にも、元親軍が改修した城跡が残っており、四国制覇の足取りを掴むことができます。企画展では、元親の四国制覇に向けての軌跡を紹介したいと思いを。(松田)

企画展 からくり人形の世界  
 関連企画のご紹介  
 — 細川半蔵と『機巧図彙』の世界 —

夏の企画展では、次の関連企画を開催予定です。

③ ミュージアムトーク  
 8月11日(火・祝)

※ サマーミュージアム

9月19日(土)

① からくり人形師・半屋弘蔵さんによる復元茶運び人形の実演(計11回予定)

\* 要観覧券(実演の観覧は無料)

予約不要

※ 日程は別表

② ワクワクワーク「遊んで学べる! 変わり屏風に絵を描こう!」(計11回予定)

\* 要観覧券 先着30名

参加費500円

※ 日程は別表



変わり屏風(バタバタ)



からくり人形師の半屋弘蔵さん

半屋弘蔵さんは、ご自身で人形を作り、実演もするという、現代のからくり人形師です。自動車メーカーにお勤めだった時代、からくり人形と電撃的に出会い、当時その道の第一人者であった半屋春光さん(故人)に弟子入りしました。春光さんは、平成21年に当館がからくり人形展を開催した際に、多大なご協力をいただいた人形師です。弘蔵さんはその後会社を退職し、からくり人形工房を設立、本格的にからくり人形師の道を歩み始めました。現在も全国各地から招かれてからくり人形の実演を行い、

忙しい毎日を送っておられます。

弘蔵さんは、細川半蔵と、半蔵を生んだ高知に並々ならぬ熱い思いをもつておられ、今回の実演やワークショップについても、すぐにご快諾いただきました。展示でも、弘蔵さんが製作した復元茶運び人形や、人形の部品パネルを紹介する予定ですが、体験コーナーで使用するおもちゃなども弘蔵さんが

準備してくださいませ。

復元茶運び人形の実演は、展示では停止した状態でしか見ることのできないからくり人形が、実際にどのような動きかを間近で観察できる、また面白いチャンスです。また、ワクワクワーク「変わり屏風に絵を描こう」では、不思議なしかけの変わり屏風(昔からある「バタバタ」というおもちゃ)に絵を描いたりシールを貼ったりして、面が変わる様子を楽しむことができます。夏休みに、ぜひご家族でご参加ください。(亀尾)

別表：復元茶運び人形の実演・ワクワクワークの実施日程一覧

1	7月4日(土)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～
2	7月4日(土)	実演14:00～、ワクワクワーク14:40～
3	7月5日(日)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～
4	7月25日(土)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～ ※サマーミュージアム
5	7月25日(土)	実演14:00～、ワクワクワーク14:40～ ※サマーミュージアム
6	7月26日(日)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～
7	7月26日(日)	実演14:00～、ワクワクワーク14:40～
8	8月22日(土)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～ ※サマーミュージアム
9	8月22日(土)	実演14:00～、ワクワクワーク14:40～ ※サマーミュージアム
10	8月23日(日)	実演10:00～、ワクワクワーク10:40～
11	8月23日(日)	実演14:00～、ワクワクワーク14:40～

● 実演のみ、ワクワクワークのみの参加可。  
 会場は2階多目的ホール。



## 『Social Story (ソーシャルストーリー)』 を作成しました!

『Social Story』とは、主に発達障害（神経発達症）の方とその家族や関係者をサポートする社会学習ツールです。発達障害の方をはじめ、当館をはじめで訪問する方、利用に不安を感じる方などが、どなたでも楽しみながら過ごすことができるよう、当事者や医療関係の専門家をはじめ、独立行政法人国立美術館国立アトリサーチセンターの協力を得ながら、作成しました。ストーリーでは、写真や文章で入館から退館までの様子が説明されています。建物の内外でのルールを事前に知ること、見通しを持って、安心して過ごす手助けとなるように構成しています。HPでも、ソーシャルストーリーのデータを公開しているので、訪問前にお使いください。（学芸課）



## 第21回岡豊山フォトコンテスト 作品募集のお知らせ

「岡豊山の春夏秋冬」をテーマに、岡豊山の写真を大募集！最優秀賞、優秀賞、スマホ大賞に加え、各種特別賞を選びます。応募作品は館内で展示（11月23日（月・祝）～令和9年1月17日（日）予定）するとともに、応募作品の一部を掲載したオリジナルカレンダーも作成する予定です。写真撮影が好きな方、これから写真を撮ってみたいと思っっている方、岡豊山の美しい季節の移ろいをカメラに収めてみませんか。たくさんのご応募をお待ちしております。

- 募集期間：7月2日（木）～10月24日（土）17時迄
- 募集内容：岡豊山で撮影した・岡豊山を撮影した写真で未発表の作品（一般部門 1人1点、ケータイ・スマホ部門 1人2点まで）
- 応募方法：高知県立歴史民俗資料館に持参または郵送いただくか、HP・QRコードのメールフォームからご応募ください。※詳細は、HPチラシ等でご確認ください。



最優秀賞「夕日燃ゆ」 明神玲子

## 着任のご挨拶

学芸員（民俗） 小林 兆太

この四月より民俗担当学芸員として着任しました。

元々東京は巣鴨にて生まれ育った私でしたが、幼い頃から虫をはじめとした自然に興味がありました。そうして國學院大學に進学し、民俗学を専攻するようになったときに「人と自然の関わり」、中でも「クモを闘わせる遊び」について卒業論文を書こうと考えたことが、今日までの己の進路を決定づけたと言えます。

クモを闘わせる遊びは、かつては日本各地の様々な地域で行われていたとされています。この文化を追いかけて千葉、神奈川、鹿児島と日本列島をさまよう中で、高知は中村の一條神社に

辿り着いたのが、神奈川大学の大学院に進学した修士課程一年目の夏のことでした。毎年八月に開催される「全日本女郎ぐも相撲大会」。焼け付く日差しが降る一條神社には、相棒のコガネグモ（高知の多くの地域ではジョロウグモと呼ばれているクモです）を笹の枝にとまらせた子供たちが集まり、クモの攻防に歓声を上げていました。それだけでなく、初めて見た四万十川の流れや、その左右に拓けた水田、一条氏の城下町に残る碁盤の目の町並み、そして立ち寄った店で買った卵巻きの

味など、当時の中村の思い出は今でも印象深く思い出せます。

そんな調査フィールドのひとつだった高知で働き始めたのは令和四年の春のこと。新たな『高知県史』の編さんが始動し、私は高知県庁の県史編さん室に民俗編の担当職員として採用されました。県史編さん室では当然、クモについてだけでなく、高知の口承文芸、信仰、祭礼、生業、民具などといった幅広い民俗の分野に関する調査に、専門委員会の方の先生方の補佐としてあたりました。中には大学ぶりに学びなおす分野がいくつもあり、改めて民俗学を一から勉強しながらの仕事となりました。なにより、四年間の勤務の中で県内全三四市町村を回り、広大な高知の多種多様な民俗文化に直接触れることができました。

もちろん、たった四年程度ではまだまだ知らないこと、見ていないことの方が圧倒的に多いと言わざるを得ません。その上、急激なライフスタイルの変化や世代交代により、高知独特のくらしについての聞き取りは今後、加速度的に難しくなっていくでしょう。これからはこの岡豊山から「人と自然の関わり」という自分の興味関心の原点に改めて立ち返りつつ、調査研究を進め、みなさんに成果をお届けできるように励んでまいります。どうぞ、よろしくお願いたします。（小林）

10月31日(土)開催!  
第17回  
**長宗我部フェス**  
諸将の参陣を乞う!

**民家で囲炉裏の火焚き**

6月21日(日) 9:30 - 12:00  
9月21日(日) 9:30 - 12:00

定期的にいっしょに火を入れます。パチパチ薪がはぜる音を聞きながら、暖かい火を囲みませんか?  
(予約不要)



**臨時休館 6月22日(月)**  
館内清掃のため終日休館いたします

岡豊風日(おこうふうじつ) 第128号  
令和8年(2026)6月1日  
編集・発行 (公財)高知県文化財団  
高知県立歴史民俗資料館  
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11  
TEL 088(862)2211  
FAX 088(862)2110

開館時間 午前9時～午後5時  
休館日 年末年始12月27日～1月1日  
臨時休館することがあります

観覧料 (通常展)大人(18才以上)500円  
団体(20名以上)400円  
(企画展)常設展示込み 700円  
団体(20名以上)560円

※特別展は別に定めます

無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・障害者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)

印刷・川北印刷株式会社

<https://www.kochi-rekimin.jp>  
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

サマーミュージアム2026  
**カラクリとモノヅクリ**

7月25日(土)  
8月11日(火・祝)  
8月22日(土)

夏の企画展「からくり人形のヒミツ」にちなみ、今年は「からくり」がテーマ!  
夏休みの自由研究、工作にピッタリなイベントが満載です!



くるくる折り紙  
マリオネット

よさこい高知文化祭2026

令和8年 秋の企画展  
**長宗我部元親の城づくり**  
—四国制覇に向けて—

10月23日(金)～令和9年1月11日(月・祝)

長宗我部勢力が関わった四国の城郭の縄張図・写真や出土資料を中心に展示し、城づくりからみた元親の四国制覇の痕跡をたどります。



岡豊城跡出土 天正三年銘瓦  
(高知県立埋蔵文化財センター蔵)

岡豊城跡模型(当館蔵)